

会 議 録

会 議 名	令和3年度第4回小金井市立はけの森美術館運営協議会		
事 務 局	市民部 コミュニティ文化課（はけの森美術館）		
開 催 日 時	令和4年1月25日（火）18時30分～19時50分		
開 催 場 所	市立はけの森美術館 多目的講義室		
出 席 委 員	鉄矢悦朗会長 山村仁志委員 原田隆司委員 坂井文枝委員 河田京子委員		
欠 席 委 員	加藤治紀委員		
事 務 局 員	コミュニティ文化課文化推進係 吉川、岡本 同 はけの森美術館学芸員 中村、河上、西尾		
傍 聴 の 可 否	可		
傍聴不可・一部不可 の場合は、その理由		傍聴者数	0人
会 議 次 第	1 事業実施報告等 2 意見交換等 3 その他		
会 議 結 果	別紙のとおり		
会 議 要 旨	別紙のとおり		
提 出 資 料	開催した展覧会・ワークショップ等及び今後の予定		

令和3年度 第4回小金井市立はけの森美術館運営協議会

令和4年1月25日(火)

**【鉄矢会長】** 皆さん、こんばんは。本日は御多忙の中、お集りいただき誠にありがとうございます。ごさいます。

ただいまより、令和3年度第4回小金井市立はけの森美術館運営協議会を開会いたします。

本日の配付資料の確認を事務局のほうでお願いいたします。

**【事務局】** では、資料の確認ですが、まず次第と、あと次に資料1と書いてある、開催した展覧会が書いてある3枚つづりのものです。もう一つが、資料2の今後のスケジュールです。そして最後に、前回の会議録となっております。以上が資料です。もしない方がいらっしゃれば、挙手をお願いします。

**【鉄矢会長】** ありがとうございます。

では、事業実施報告等について、事務局から説明をお願いしたいところなのですが、少し順番を変えて意見交換等を半分ぐらいやりながら待つという形で進めたいと思います。オミクロンの愚痴でも構いませんので。

大学のほうの情報を出しますと、大学はオンラインではなく対面も続いています。対面の授業も同じように続けていて、前回のまん延防止等の措置のときとはちょっと違ったムードです。副学長からもメッセージが出て、課外活動は基本的に中止なだけけれども、教員が全部ついてくるというものとか、ちゃんとまん延防止の対策をやったものであれば、一度立ち止まってみて、本当に必要なものなのかよく考えてやってくださいということです。もしそれでみんながちゃんと検討したことであれば、その結果には愚痴はついてこないだろうと、希望という言葉がついてくるのではないかというような。私が言うと名台詞じゃないんですけど、副学長が言うと名台詞でありました。立ち止まってしっかり考えて、本当に必要なことならやるべきだろうという判断したものはやるんだと。そのときには愚痴はない、愚痴には出てこないだろうというのは確かだと思っていますので。

やはり国が社会活動を止めないという意図も分かりますよね。それが安全という名の中で、やっぱり死が目の前にあることなので、異常に怖くて止めてしまうことがいいことかどうかというのは。

今、順番を変えて意見交換等から始めていますので大丈夫です。

というのが大学の今の状況ですけれども、役所はどうですか。

【事務局】 テレワークということで、やっと少しそういう形をやるような雰囲気になってきました。

あとやっぱり業務が回らなくなってしまうと困ってしまうので、ある程度見通しを持って、職員が何割ぐらい出勤できない場合は、緊急的に優先しなければならない業務をやるという考え方も出てきています。

【鉄矢会長】 営団地下鉄もそうです。営団地下鉄と言わないのか、今。地下鉄も何かパンデミックダイヤをつくっているとか。少ない人数で動かせるというか。そうしないといけない状況ですね。家族が持ってきて誰も文句言えないですもんね。

【事務局】 今はもう本当にどこでもかかる可能性があるということで、きちっと対策していてもかかってしまう場合もあるので。

【鉄矢会長】 でも重症にならないとかと言っていますけれども、変わらないですね、基準は。

【原田委員】 重症化率が少なくても、これだけ1万人、2万人でなると、結局、重症になる人の数は増えるんですよね。特に我々高齢者は、それが怖いので。結局でも、どういう決まりができたからどうこうというよりも、もうこの2年の経験で自分で考える。例えばマスクは、今までは僕は洗える布だったんですが、先週からこの不織布、使い捨てにするとかね。それぞれがきちんとやっているんじゃないかなと思います。

映画をよく見に行くんですが、最初の頃は市松模様というか、前後左右がいなかったんです。最近は、映画館は換気がよくて、よそよりも安全だと。

【鉄矢会長】 黙って見えていますからね。

【原田委員】 シャベりませんからね。だから何か全然市松じゃなくなっちゃって。

【鉄矢会長】 そうなんですか。

【原田委員】 ええ、見にくくなりました。

【鉄矢会長】 入館者はどんな感じでしょうか。

【中村学芸員】 この後の開催した展覧会の事業報告のところと重複しますが、先にそこを先行して言わせていただきますと、最初の秋の企画展の入館者数のところが、資料の1の冒頭のところに出ておりますように、トータルで1,743人です。やっぱり久しぶりに1,500を超えたというところはあるんです。月曜、火曜の2日の休館日を

取って1,500人を超えていますので、1日当たりの入館者数としては比較的良好ということはあるんです。ただ、やっぱり秋の展示として考えると、通例でいけば2,000人ぐらい入るとというのがいつもの印象であって、2019年の最後の企画展は3,000人超えましたから、そこで言えばやっぱり影響が全くないわけではなかった。開いている日に限って言えば健闘はしているけれども、やっぱり出足として見れば、かなり限られた。開館時間自体がそもそも前後を削っていますから、そういうことで言うと影響はゼロではない。やれる範囲でやって、お客さんとしても開いているところで来てはくれたけれども、トータルとして見るとどうしても開いている時間が短いことによって来館者の数は減ったという傾向は否めないという感じです。

【鉄矢会長】 予約制ではないんですね。

【中村学芸員】 予約制ではないです。

【鉄矢会長】 ないんですね。自分自身が、予約と言われるとどきっとして、何かスケジュールを組まれるのが嫌いな……。

【中村学芸員】 そうですね。やっぱりそういう思い立ったそのときに行けないというのは、できる限り避けたいというのは、この美術館としてはあります。特に地元の方たちが、今日行こうかと思い立ってホームページを見たら、前日までに予約してくださいとなっているというのは、これは残念というか、避けたいなというのはあります。ただ、やっぱり時間としては少し短縮していますし、この後の話をさらに先取ってしまうと、鑑賞教室なんか1教室開催できていなかった。結局、制限の中でやれる範囲のことはやって、一応そこに対して相応の成果というのは、入館者数としては出ているけれども、ただ、コロナ前みたいに、何でもかんでも元どおりというわけじゃないなという印象です。

【鉄矢会長】 でも、皆さんがやっているお仕事の中で、すごい成果は、感染者を出していないということなんじゃないですか。

【中村学芸員】 そうですね。今のところ、ここで感染したということは。

【鉄矢会長】 それは多分物すごく、今、今日も吉川さんが拭いていてくれて、アルコール消毒していて、アルコール消毒を進めるというのは、新しく業務に増えていて、そこで我々が、学校もそうなんですけれども、感染者を出していないという状況は、みんなで褒めたたえていいんじゃないですか。

【中村学芸員】 そうですね。2020年の夏頃は、受付票を記入してもらおうとかということに対して、必ずしも全ての来館者の人に理解を得られたわけではなかったんです。

何で住所入れなきゃいけないんだとか、個人情報はどうなるんだとかということ、苦情ではないけれども、危惧として言う人というのもゼロではなかったというところがあるんですが、今回の秋の展示に関して言えば、受付票の記入ということを協力として依頼して、お客さんのほうで、皆さん、それを「感染対策としてやるべきこと」として受け入れて、中に入るという感じでした。みんなで頑張っって協力していくという意識は、やっぱり来館者の方たちの中にも出来つつあるのかなという感じ。それで本当に、ここから出た感染者がなかったとか、そういうことというのは非常にありがたいことではありますけれども。

【鉄矢会長】 元に戻るのではなくて、前より低くなって、元気がなくなって、どうのこうのっていう評価だけじゃなくて、いい評価を探さない。

【中村学芸員】 本当に久しぶりに、1年ぶりぐらいにはけの森に来てよかったという人もいましたし、ちょうどやっぱりシーズンとしても秋で、ちょっと家から外に出て、展示を見て、緑地なんかも見るという形で、すごく気持ちが切り替わったみたいなお客さんもいらっしやいましたから。

【鉄矢会長】 どうですか、お二人は、新しくこの1年を振り返って。せっかくだから。意見交換ですから。いきなりコロナでね、委員の顔も分かっていないですもんね。

【西尾学芸員】 そんなことはないです。

【河上学芸員】 今、オミクロン株が拡大している時期ですが、美術館はちょうど休館中、実際には、毎日勤務はしているんですが、展示はしていない状況です。去年と違うのは、春の展覧会準備をしているところですが、ワークショップとは関連イベントをやるうというような方向で今いろいろ動いていまして。今ちょっとこういう状況ではあるんですが、ポジティブな気持ちを持って進めているところです。後で、この資料1のほうで、また御説明はすると思うんですけども、そのような状況です。

【西尾学芸員】 今年、鑑賞教室が11月から12月の頭にかけて、こちらも後で少し話があると思うんですけども、大体7校ぐらいが立て込んでいまして。去年は鑑賞教室自体が中止というふうに伺っていたのですが、今年からちょっとまた再開してみようということで始めた鑑賞教室が、やっぱりコロナということで距離感だとか、1階と2階に入れる人数もかなり分けたりですとか、なかなか手探りで、しかも学芸員の人手も足りない中でかなり大変だったんですが、来年からは今年のやり方というのを踏まえて、もう少しコロナ禍の鑑賞教室がスマートにできるように、先生方と相談していけたらいいなど。ち

よっと今年はなかなか大変でしたので、来年からはもう少しやり方をアップデートしていただけるかなと思っております。

【鉄矢会長】　そうですね、鑑賞教室をやったということ自体がやっぱり美術館の教育普及事業をしっかりと遂行したということですよ。

【西尾学芸員】　そうですね。

【鉄矢会長】　コロナ禍において安全に。

【西尾学芸員】　コロナ禍に。そうですね。

【鉄矢会長】　コロナ禍において安全に教育普及事業の1つの骨となっているところをちゃんとしっかり進めたというのは、これはすごい価値じゃないですか。(拍手)

【中村学芸員】　昨年度はやっぱり開催自体が、感染防止という観点からするとできないだろうという判断だったので。

【鉄矢会長】　確かに。

【原田委員】　この鑑賞教室は予定どおりのものが全部こなせたという感じなんですか。

【中村学芸員】　いえ、緊急事態宣言にかかった2校というのが、やっぱり宣言中の実施ができなくて、1校はずらして実施できたけれども、もう1校はずらしたら日程が企画展の会期と合わず、結局来られる日がなくなっちゃったんです。

【鉄矢会長】　そうか、前は緊急事態宣言で、今回は蔓延防止措置なんだ。

【中村学芸員】　そうなんです。

【鉄矢会長】　その違いがよく分からないですけどね。国も初めてのことなんで。

【原田委員】　学校サイドからは何か意見とか。

【中村学芸員】　美術館と学校との間や、校長先生たちからの意見として一括した方針が出されるということにはなかったもので、先生たち、現場の人たちでどうするかということをお話し合っていくという形になりました。先生たちからの希望としては、今までここでやってきた教育普及事業の鑑賞教室の中で体験できたようなことというのを、コロナ禍だからということで諦めてしまうというのはやっぱり残念だけれども、じゃあそれを感染対策を取りながら、どういう形に変えていくのかということというのに、具体的な答えを持っている人というのは誰もいない。先生たちから、こういうことをしたいとか、こういうことはできるのかという要望が出て、それを聞いた上で、検討してみたけれども、実現する人手が足りないとか、体制的にそういう大きいスペースがないとか、設備がないとかということで、ちょっと難しかったこともあります。あとは、要望のと通りの形では実現でき

ないけれども、代替の案としてこういうのがありますよみたいな形で、それを少しアップデートしていったりとかというような形で最終的なところにこぎ着けていった感じです。

【鉄矢会長】 これ、鑑賞教室で子供たち、今年の何か様子で、初めて来たという子供ってどのぐらい、学校によって違うんでしょうけれども。

【中村学芸員】 どうですかね。

【河上学芸員】 ほとんどですね。

【西尾学芸員】 ほとんど。

【鉄矢会長】 ほとんどが初めて。

【河上学芸員】 この辺りの小学校、一小とか南小とか、あと前原とかの子供たちの中に、何人かカフェに行ったことがあるとかというお子さんは。

【鉄矢会長】 ここに来たという意味ではなく、府中でもいいし、国立博物館でもいいし。

【中村学芸員】 美術館自体が初めてと言っている子も結構いました。

【河上学芸員】 多かったです。だからすごい……。

【原田委員】 それを聞くと、やっぱり効果は大きいですね、この学習効果ね。この2年間で、例えば、最初は学校が休みになっちゃいましたでしょ。ステイホームだとか、いろいろな子供たちには制限がかかっている、初めて美術館というところに来たら、何か自分の気持ちがどうなるかというのは、すごくいい体験として残ったと思います。この時期だからこそというかな。その記憶を残しておいてもらえると、いつも以上に教育効果があったんじゃないかなという気がしますけれどもね。

【坂井委員】 何年生でしたっけ。4年生？

【河上学芸員】 4年生です。

【鉄矢会長】 4年生、10歳。

【原田委員】 10歳。

【河上学芸員】 10歳です。

【原田委員】 音楽、コンサートもそうです。最初の頃はコンサートや美術館というのは、不要不急の分類に入っていたんです。

【坂井委員】 そうですね。

【原田委員】 けどそうじゃないということがだんだんこの2年で分かってきたような気がします。そういうことも子供たちは学んだんじゃないかと思います。

【鉄矢会長】 やはり小学生の段階で、どれだけ多様な体験をできるかというのが、教育格差、経済格差が実はつくっているという、学芸大はそっちの研究もやっているの、そうすると経済的に困難な状況のうちが、特にステイホームとか何かしてくると経験がどんどん減ってくる。家にいるのと学校にいることしかできなくなってくる。あとは本当にバーチャルな世界をちょっとのぞくぐらいになるけれども。その中で、全部こっちに向くわけじゃないけれども、体験させるということだけでも、物すごくこの美術館の中で、行ったことあるよというだけでも、そこで本気で研究している学芸員さんのお話を聞いたよというだけでも、すごく価値があるんだろうなと思って。

【原田委員】 すばらしいですね。

【鉄矢会長】 あと東京学芸大学の、ここの学芸員の中村さんは、今うちの学芸大学の特任でしたか。

【中村学芸員】 特任講師です。

【鉄矢会長】 特任講師をしていただいている、この間、学芸大学の大学紀要が出まして、その中で、はけの森美術館の教育普及に関して。

【中村学芸員】 はい、そうですね。

【鉄矢会長】 書いていただいて。

【中村学芸員】 ただ2019年までの実施報告として、2020年の段階でまとめたものなので、それこそ鑑賞教室、書いていた時点では、もう全部実施できなかったです。今年はどうなるか分からないという状況の中で書いていたものですね。これからコロナ禍に対して学校側と美術館側とどうなっていくんだろうかという、そういうまだ手探りの状況の中で、少なくともコロナ前までに何をしてきたのかを見直した内容になっています。

【鉄矢会長】 ウェブ上で読めるように公開になっている。URLはこれですとはずぐ言えない。東京学芸大学紀要で73号。

【中村学芸員】 はい、73号です。

【鉄矢会長】 芸術・スポーツ系というので検索していただくと、多分ずら一と出てくるので、その中で中村先生のが出てくる。おっ、はけの森美術館だ。タイトルにはけの森美術館、入っていますね。

【中村学芸員】 はい、入っています。3年度分見直して、やっぱりコロナ前に、少なくとも継続的にそうやってずっとやってきたのが、一つ一つは小さいことなただけでも、確実に1つの土台になっていたということと、あと改めて、続けてきたからこそコロナ前



の状態ですら無理があったこととか、このまま続けていくには少し見直しをしないとけないことであるとかという部分というのが、体制自体に本質的に抱えられているということも見えてきたので、そういう意味では、見直しの作業としては非常にいい機会になったと思います。

【鉄矢会長】　　じゃあ、大丈夫ですか。7時に終わりますかね。ただの遅刻だったら、もしかしたら来ないかもしれないですけども。どんどん進めて。

私は昨日、この会議があるような気がして、一瞬、8時頃、大学で仕事をして、ヒヤッ。怖いですよ。

コロナでも、町は人がいっぱいいますからね。人のいないところでこういう話をしていると、本当に大変だから静かにしなきゃいけないと言うけれども、町出ると、あれ、こんなにいるって思うから。

【坂井委員】　　話は全然違うんですけども、もし時間があるなら。先日、立川のPLAY!MUSEUMに初めて行ったんです。柚木沙弥郎さんが見たくって。それで、あそこがあんなになっていたこと自体を知らなくて、一体これはいつこんなことに、こんな開発をいつ進めていたのっていうのが、全体、開発自体として驚いたんですけども、あの美術館は立川市の美術館なんですか。

【中村学芸員】　　いや、あれは違います。

【坂井委員】　　個人？　個人でもないですよ。

【中村学芸員】　　あれはたしかデベロッパー系の企業が関わっています。

【坂井委員】　　いわゆる商業施設が多いじゃないですか。商業施設の1つのコンテンツとしてミュージアムがあるという位置づけだなあというのはつくりとして分かるんですけども、でも商業施設には美術館の企画・運営とかできないだろうし、あれは立川市なのかなとかって思って見てきたんですけども。

【中村学芸員】　　いえ、ミュージアムという名前を冠するということと、博物館法における博物館相当施設の認定を受けることは、別の話なので。ミュージアムというのは、例えば思い立って今日からここはミュージアムだっていうふうに個人が言うことについても何も法律的な縛りはないんです。

【鉄矢会長】　　あれですか、プチプチがいっぱい垂れ下がっている遊び場みたいなものかやっているのもそこですか。

【坂井委員】　　いや、どうだったかな。もう一つあるのかな。

【鉄矢会長】 何か物すごい量のプチプチで子供が遊べるようになっていて、子供はすごく楽しそうに遊ぶんだよ。

【坂井委員】 プレイというほうには、ちょっとあまりあれで、もしかしたらプレイというのもその程度。

【中村学芸員】 少なくとも博物館とか博物館相当施設なのかということとは別の問題として、そういうミュージアムという名前を冠するものをつくって、運営するということに対して、例えばあなたのところはやっていいよとか、あなたのところは業者だからやっちゃ駄目だよとかというような縛りがあるわけではないです。少なくともそれに対してお金を出して運営していこうという気のあるところだったら。

【坂井委員】 できると。

【中村学芸員】 できます。

【鉄矢会長】 コレクションもしないで、ギャラリーのように、貸ギャラリーのような顔をして、あとこういう子供の遊び場をつけて PLAY!MUSEUM って。

【坂井委員】 コレクションは絶対全然ないような。

【鉄矢会長】 ないですよ。

【中村学芸員】 ちょっと性格は違いますけれども、東所沢にある角川書店がやっているミュージアムなんかもそうです。

【鉄矢会長】 あそこ、行ってみたい。カドカワね。

【河上学芸員】 ですよ。何か建物も格好いい。

あと、その PLAY!MUSEUM も PLAY についているせいか、それとも先生がおっしゃるプチプチやれるところを併設しているせいか、子供、柚木さんは子供のあれではないですけども、併催は「ぐりとぐら」でしたし、今回はケストナーだと言っていたので、子供にちょっとフォーカスしているのかなというのはありますね。

【鉄矢会長】 子育て世代を。

【坂井委員】 うん、かなとは思いました。

【鉄矢会長】 どんどん引き込む。

【河上学芸員】 遊び場があるっていうのが多分みそで。

【坂井委員】 そうなんですよ。

【河上学芸員】 子供を連れて行って、子供を遊ばせる場所をみんな親は探し求めている。

【坂井委員】　それがちょっと気がつかなかったな、プチプチも含めて。きっとそうです  
ね。

【鉄矢会長】　怖いんですよ。遊ぶところがないって子供が言うようになって。そ  
こに行くと遊べるという。そこに行かないと、ここには何もないとか、遊べないとか。

【坂井委員】　どこでだって遊べますけれどもね。

【鉄矢会長】　そう。自然がいっぱいある、この間、宮崎の延岡市に行ったときに、延  
岡の方々が、うちにはここしか遊ぶ場所がないですって言うから、余分なことじゃない  
のって。でも、それって多分、そういうふうにどんどん飼いならされていくというか。

【坂井委員】　そうなんです。はい、ここで遊びなさいみたいなね。

【鉄矢会長】　そう。遊び場という遊ぶところになっているんで。あとは危ないから  
ってなっているんで。危ないのは分かるんだけど、それもなあと思って。

立川は本当にマンションがあって、子育て世代をどんどん入れて。

【坂井委員】　そうなんです。

【鉄矢会長】　すごいですよね。

【坂井委員】　それは、あれだなと思いました。立川だって言われなければ、ここは何  
か白金か、都心みたいな感じの、理想の格好いいフラットのすごいオープンエアーな商業  
施設とかで、こんな格好いいものができて。私、定年退職したときに、立川のハローワー  
クに何か月か通ったので、そのときに、あそこ、何にもない。ハローワークってどこにあ  
るか御存じですか。

【鉄矢会長】　はい。

【坂井委員】　何にもない道をとぼとぼとぼとぼ、しかもハローワークに行くというこ  
と自体がちょっと心細い感じだったのが、その道筋に、わー、こんな素敵なものができて。  
二、三年前ですかね、行ったの。びっくりしました。

【坂井委員】　そうですね。

【鉄矢会長】　で、奥に I K E A があって。ですよ。I K E A の。

【坂井委員】　そう、I K E A のつい手前までが続いたんです。

【鉄矢会長】　ずーっと続くんですね。あそこは何もなくて I K E A だった。

【坂井委員】　そうそう、そうだった。

【鉄矢会長】　やっぱりデベロッパーは開発の研究をしていますからね。

【坂井委員】　そうですね。力ありますね。あれが続けられればということですよ。

【中村学芸員】 「小さい時に経験したもの」というのをビジネスチャンスにつなげていこうということだと思っんです。それは単純にお金がかるとかということだけじゃなくて、やっぱり小さい頃にそういう体験をする中で、イメージの中に刷り込まれていったりするものは、すごく大きい。いい意味で、いろいろな商業チャンスに結びついていくだろうと。ということで、デベロッパーがミュージアムみたいなものを運営していくというのは、いろいろな形で結構起きているので。

【坂井委員】 そうなんですよ。そう思いました。

【中村学芸員】 杉並の荻窪の駅の先にも、あれは多分、区の結婚式場だったんだと思っんですけれども、使わなくなった建物に杉並アニメーションミュージアムが入っている。運営委託はたしか日本アニメーション協会だったか、アニメをつくっているプロダクションなんかに参加がしているところが運営委託されてやっている小さいミュージアムです。そこなんかもやっぱり、アニメをつくっているプロダクションたちが集まって上映や展示をすることで、子供たちがそこに来て、そういうものに興味を持ったりとか、あとは大きくなってアニメづくりに携わっていく人材になるんじゃないかということ期待してやっているみたいですから。

【原田委員】 そういうビジネススペースでやっているところには、学芸員さんっているんですか。

【鉄矢会長】 キュレーターという名前にいるかもしれないですね。

【中村学芸員】 そうですね。やっぱり学芸員という名前にすると、そういう商業面の目的とそぐわなくなってきちゃうというときもあるので、あえて横文字にして、ふわっとさせるということが多いです。

【原田委員】 資格自体は学芸員資格を持っている方がやっているんですか。それとも。

【鉄矢会長】 それはどっちでもあり得るね。

【事務局】 そうですよ。

【原田委員】 何か新聞の記事で見たんですが、公立の美術館や博物館を社会教育の枠から外そうという動きが、法律を変えてですね、あるやに聞いたんですけれども、今の話とリンクすると思っんですが、とにかく客が来なきゃ話にならないだろうということで、どんどんそっちに傾いていくと。

【鉄矢会長】 エンターテイメントになるんで、国立の博物館も民間に貸し出して、いろいろなことをやって、心を痛めている方もいるし、喜んでいる方もいるという、その両

方です。

【中村学芸員】 ですね。やっぱりいい面と悪い面が常にあるので。お金に結びつかないものは全部駄目だっていうふうにしちゃうとやっぱり変なことになっちゃうところが出てきます。

【原田委員】 そうですね。

【鉄矢会長】 時代を超えて研究成果に感動したりしますからね。美術館の研究成果に。

何だっけ、あそこ、現代美術館がアニメ系をどんどん入れたときは、ああ、これで人集めになっちゃったのかなと思ったときがありました。確かに人はいっぱい集まるし、だけど、そんなにやったら疲れちゃうぞと。

【中村学芸員】 そうですね。そのときには全然展示する価値もあるともみなされなかったものが、20年、30年たってすごく重要な意味を持つてくるということもある。そして意味というのは必ずしも、例えば経済効果が何億円ありましたとかっていうことだけではない。経済の尺度だけで全てをいいと言えるわけじゃないし、例えばミュージアムの存在によって立川の地価が評価額1坪当たり何万円上がったからすごくいいんだということだけで全てを評価しちゃうということは乱暴です。ただ一方で、デベロッパー企業とかそういう民間の力が入ってくることによって、今までになかったものができたりとか、公共事業だったらとてもお金が出せないような充実した遊び場ができたりもする。それはそれでまた全部否定しちゃうことでもなくて、非常に重要なことだだと思います。

【鉄矢会長】 両方が揺れてなきやいけないんでしょうね。大学で学生が入ってきても、アートは美術館にあるものだと思っている学生もいる。もっとデザインなんか、普通に売っていたり、普通の人の暮らしの中の工夫にいいデザインっていっぱいあつたりするので、それを見ないで、いや、美術館にコレクションされたものがいいものだとか思えていないと、かわいそうだなと思って。でも、もちろん美術館もいいものがないわけじゃないから、両方を考えなきやいけないだろうなと思います。

本当にだから遊び場がここにしかないと思うようになっちゃうと、かわいそうなんだろうなと思って。

じゃあいよいよ、お待たせしました。事業実施報告。1番に戻りましてスタートをします。よろしくをお願いします。

【中村学芸員】 では、資料の1を御覧ください。開催した展覧会、企画展のところから報告させていただきます。企画展の展示のほうは会期中に御覧いただいていますので、

展示内容については省略させていただきます。10月30日から12月の12日までの会期中、「二人のスケッチー藤島武二と中村研一」という企画展を開催いたしました。こちらは、公益財団法人大川美術館から藤島武二のスケッチコレクションを借用いたしました。当館所蔵の中村研一のスケッチと併せて展示をするという展示内容になっておりました。入館者の内訳は、ここに示しておりますとおりで、合わせて1,743人の入館者がありました。入館者としては、先ほども申し上げましたように、久しぶりに1,500人を超えたという形にはなっておりますがコロナの影響というのはゼロではなかったという感じがいたします。団体の入館者が、700人ぐらいありますけれども、これは下のところに示しております鑑賞教室のほうで来た各学校の人数を合わせたものになっています。それ以外の、ちょっと一般の人数が、すみません、脱落しておりますが、1,000人ぐらいというのが一般で来たという人になります。

ちょうど緊急事態宣言中に準備がかかったりもしながらしておりましたので、なかなか準備としては思うように進まない時期もあったんですけども、全面的に大川美術館のほうからは終始協力を頂くことができまして、作品を借用して、111点展示をするという形が実現しました。11月の真ん中には展示替えも入れまして。トータルの展示数としては、コロナ前を含めて考えても、かなり当館の展示作品総点数としては多かったと思います。作品はスケッチでしたので小型の作品が多かったんですけども、その分、鑑賞してくださる方というのはじっくり見てくださる方が多くて、そういう意味では、なかなか久しぶりに企画展をやったかいがあったなという感じがしました。

ちょっとこれも重複しますが、会期中は幸いコロナの陽性者を出したりするということなく終えることができまして、作品は12月中に大川美術館に返却するという形で無事にお返しすることができました。

開催した企画展の報告としては以上になります。

**【鉄矢会長】**      ありがとうございます。

説明が終わりましたでいいのかな。企画展のほうはこれですね。実施報告等ですから、次、では、教育普及事業はさっき言ったんですね。3年に入ったわけかな。

**【事務局】**      教育普及事業、でも学芸員実習を報告していない。

**【鉄矢会長】**      学芸員実習のほう、じゃあ報告をお願いします。

**【西尾学芸員】**      去年の11月の16日から12月14日の中から合計7日間の間、学芸員実習を受け入れて、無事それが今月上旬に終了いたしました。実際にやっていただ

いたことというのは、鑑賞教室の際の補助業務として、児童があまり密集し過ぎないように、あとは壁にぶつかりそうになったりした子供をちょっと注意していただいたり、実際に最終的にはギャラリートークのようなことも最後のほうでは行っていただきました。そのほかにも、試しにキャプションを書いてみたりですか、そういったことを学芸員の監修の下で、そういった経験も本人は希望されておりましたので、そういう形で学芸員実習を行いました。

感想としましては、やはり当館3人の学芸員が毎日いるというわけではございませんので、やはり恒常的に学芸員実習を受け入れるということ自体は当館では難しい。今回はいらした方が、もう既に社会で働いている方ということもありまして、ただ、実際に大学4年生で学芸員を目指していて、学芸員実習を受けたいという生徒が、今後そういう希望をされる方がいらした場合に関しては、少し検討を要するのではないかなど。今回は受け入れたんですけども、今後のことについては、少し検討を要すると思っております。

以上です。

【鉄矢会長】      ありがとうございます。

今回が初めての受入れ。

【西尾学芸員】      そうですね、学芸員実習の受入れとしては、今回が初めてです。

【鉄矢会長】      それ、どっかで明文化しておいたほうがいいですね。

【西尾学芸員】      そうですね。

【鉄矢会長】      何か実績があるのに、何でうちは受け入れないんだって突っ込みが入ってきたときに。

【中村学芸員】      ただ、ちょっとそこはやっぱり難しいなと思うのは、先ほど西尾のほうからも報告があったように、今回の学芸員実習、1名だったんですけども、この方は社会人で、従事している仕事が文化施設に関わる仕事でして、かなり特殊なケースではあったんです。そういう経験を踏まえて学芸員実習の中で、実習をすることで何か得られるものがあるだろうと。事前に結構細かくヒアリングと打合せをした上で実施を受け入れています。この人だからうまくいったという感があるので、これを一般化しちゃうということが少し難しいなというところがあります。

【鉄矢会長】      ただ、年報なり何かに、このまま載る格好になると、ああ、受け入れるところなんだって読まれるんだろうなと思ったので、何かそこにエクスクューズを入れたほうが。

【中村学芸員】　そうですね。これはつけておかないと、つけておくべきだと個人的には思っております。

【鉄矢会長】　　と思いました。

【坂井委員】　　実習者サイドからの何か評価というか、フォローはあったんですか。こうでしたという。こんなことをもっとしてほしかったとか、そういう。

【西尾学芸員】　　今、学校のほうにそういった形でまとめて報告を出されているそうです。

【坂井委員】　　そうなんです。なるほど。一般に実習生の受入れとかっていうのは、美術館とかというのは、どんな感じになっているんですか。

【鉄矢会長】　　受け入れてほしいと思っている。学芸員になりたいというのは物すごく多いんです。だからある意味多いんです。多いのと、学芸員が、単位を取ると、学芸員資格が取れる方向になっているので、単位を取れると思って来ちゃった人間は、あとは学芸員実習だというと、そこを開発している先生が、例えばうちは君塚先生という先生なんですけれども、その先生1人で全部やんなきゃいけないという感じになったり、大変なんです。

【中村学芸員】　　文部省の答申として、そもそも実施を行う館の人員体制に対しては、かなりはっきりと常勤の職員がいないところじゃ、できればやらないでくれと言っているんです。常勤の人間がいないところで学芸員実習をするというのは十分な効果を得にくい。受け入れる側としても、ちゃんと実習生のフォローをしようにも、なかなかそういう環境がない。実習を受け入れるんだったら人員体制がしっかりしていて、常勤の職員が恒常的に学芸業務に当たっている環境が整備できていると胸を張って言える館が受け入れてくれということ、これは文部省のほうでも答申として示しているんです。

【鉄矢会長】　　文部省の答申が、多分正しかったような気がするというのは、この人だったからできたけれども、本当に来たら文部省の答申どおり困ったことになったかもしれないという。

【事務局】　　そうですね。

【鉄矢会長】　　だからちょっと今、今後の学芸員実習は検討を要する。

【中村学芸員】　　そうですね。やっぱりそこで言うと、日数だけで済ませちゃうということが起きないように、受け入れる側も、受け入れてもらう人も、重々確認した上でやってくださいねと。単位を認定する側である文科省から示されているんです。今回のところ



は、その部分がおぼつかない状態だったけど実習生のほうで強い希望があって、かつ社会人の学生で細かく学校の事務のほうにも掛け合っただけでいいですよと、言質を取り付けてきたということだったので、まあ実施はしたんですけども。ただ、今回のこのケースというのがかなりイレギュラーであるということは、確かなのでその部分をスルーしちゃうと、ちょっと変なことになっちゃうなという感じです。

【鉄矢会長】 記録を気をつけないといけないですね。

山村先生、ここ、上からずっと。意見交換は最初にちょっと順番を変えて、半分ぐらいやって、それから今、また1番の事業報告をここでやっています。

【山村委員】 東京都美術館の学芸員実習、受け入れていないんです。

【原田委員】 ええ。そうなんですか。

【山村委員】 何でかって、今おっしゃったとおり、そういう体制が取れていないので、また職員も少なく、そういうことが十分できる時間もない。そういうことで受け入れていません。

【鉄矢会長】 とびラーはやって。

【山村委員】 とびラーはやっています。

【鉄矢会長】 とびラーをやって、実習としてじゃないですもんね。

【山村委員】 とびラーはだって実習とは全然違うものなので。

【鉄矢会長】 ありがとうございます。

では、次に、今後の開催予定の展覧会について、事務局から説明をお願いいたします。

【河上学芸員】 3番、今後開催実施予定の展覧会等について、1番の展覧会ですけれども、3月27日から5月8日まで所蔵作品展を開催する予定であります。タイトルは、「かげもまた光なりー中村研一の色」ということで、中村研一の戦後の作品を中心に紹介する内容の展示を予定しております。開館時間と休館日に関しましては、引き続き短縮した形で11時から16時、入館が15時半まで、休館日も週に2回、月曜日と火曜日を予定しております。最終日の5月8日は、中村研一のお誕生日の5月14日を記念して無料観覧日ということで設けようと考えております。観覧料につきましても、通常の所蔵作品展と同様、一般200円、小中学生が100円ということで進める予定です。

以上です。

【鉄矢会長】 ありがとうございます。

引き続き、関連企画のほうをお願いします。

**【河上学芸員】** 今回の所蔵作品展の関連企画に関しまして、今2つ予定しております。1つ目が、イベントとして所蔵作品展の開幕の前日の3月26日の午後にギャラリーコンサートとして、ソプラノ歌手の蒼道子さんをお招きしてコンサートを開催する予定です。こちらに関しましては、実際、おとし企画をしていたものがコロナで開催が中止になって、そのリベンジという形で、今回の所蔵作品展の関連イベントとして、再度、企画実施を目指しております。内容に関しましては、こちらに書いてあるとおりで、事前申込制、チケットを1,000円にして鑑賞チケットを、カフェのほうでアフターティータイム付きのオプションもつけて開催する予定でして、こちらのコンサートの後に担当学芸員が、今回、私なんですけれども、担当学芸員によるギャラリートーク付きという内容で予定しております。

続きまして、(2)番の、こちらは所蔵作品展の関連ワークショップということで、開幕後の3月30日と3月31日、2日連続、ちょっと次のページにまたいでしまうんですけども、2日続けてアーティストの山本修路さんをお招きしてワークショップを開催する予定しております。対象の参加者は、基本的にはどなたでもという形で、①番の3月30日のワークショップに関しましては、葉っぱの標本を一緒につくろうというワークショップなんですけれども、これは5歳以上、ちょっと字を書いたりすることがあるかもしれないということで、5歳以上という形で募集をしようと考えております。②番に関しましては、小さな木の端材、木っ端に色を塗って、ペインティングをするワークショップなんですけれども、こちらはどなたでも、色を塗って楽しめるお子さんからどなたでもという形で募集をする予定しております。今回、(2)番に関しましては事前申込みではなく、当日受付、ふらっと来た方でも気軽に参加していただけるような内容になっております。

(3)番は、さっきちょっと申し上げた無料観覧日です。5月8日の最終日は無料観覧日に設定しております。

以上です。

**【鉄矢会長】** ありがとうございます。

**【坂井委員】** ②番は、すみません、②番は、河上さん、あれ、日時はいつなんですか。同じ。

**【河上学芸員】** すみません、3月の31日。

**【坂井委員】** ②ですか。

**【河上学芸員】** ②の次のページの一番上の。すみません、2ページにまたがって。

【坂井委員】 これですね。ごめんなさい。失礼。

【河上学芸員】 いえいえ。

【坂井委員】 分かりました。

【河上学芸員】 2日連続で。

【坂井委員】 分かりました。

【山村委員】 ②番の講師は誰なんだ。

【河上学芸員】 2つとも山本修路さんです。

【鉄矢会長】 すみません、(1)番のコンサートの、プレイベントとなっているもののつながりをもう少し。

【事務局】 ギャラリーコンサートですか。

【鉄矢会長】 ギャラリーコンサートの、展覧会と、「かげもまた光なり」とつながって……。

【事務局】 「かげもまた光なり」の展示をしているなかで、蒼道子さんのコンサートを行います。

【鉄矢会長】 いや、ここが、何でこのギャラリーコンサートが。

【事務局】 このギャラリーコンサート、3年前に初めてやったんです。絵画を展示した中で音楽を聞くということをやりました。

【鉄矢会長】 やりましたね。

【事務局】 そのときは吉野直子さんというハープの方に来ていただいたんですけども、それを開催した後に、市の駅前のホールの企画の担当が、小金井市内の中で、いろいろところでコンサートをやるという企画を持ってしまして、それをぜひ美術館と一緒にやれないかということで、アーティストさんの御推薦のほうをホールのほうでやっていただいて、会場をうちが提供して、絵画を見る中で音楽を聞くというギャラリーコンサートをやろうとおとし企画していたんですが、コロナであえなく駄目になった。去年はもう残念ながらできなかつたですけども、今年少し感染が収まっていた状況の中で、もう1回同じ企画を、せっかく来ていただく予定だったアーティストさんですので、ここを下見していただいて、物すごく気に入っていただいていたので、やっぱりなかなか絵が好きな人は絵しか見ないし、音楽が好きな人は音楽しか聞かないというのがちょっと残念だなと思ったので、絵画も音楽も聞いていただけたらいいなということと、以前ここでコンサートをしたときに、やはり実は音楽家の方たちが物すごく下の展示室は音響がいいって言っ

ているんです。

【鉄矢会長】 はい。パネルだからね。

【事務局】 はい。なので、とても気持ちよく演奏していただけるということがあるのと、そのホールとの連携という形、美術館とホールの連携というところで、展示が開始する1日前に、プレのイベントでこういうことをやったらどうかということで。

【鉄矢会長】 その位置づけを何か明確にしておいたほうが、今後もシリーズ化しやすいんだろうなと。

【事務局】 そうですね。

【鉄矢会長】 何か今の、これもいいし、あれもいいし、歌った人が気持ちよかったからとかではないと思うんです。今一番最初に言った、音楽と美術というものを同じ場で響かせてみる、試験的なことをしばらく続けるというような話なのか。人によっては、絶対音感がある人なんかは、絵を見ながら音楽が流れるのは嫌いだという人もいますので、明確にこれが、最初、この時代のこういう歌が出てきますよとか、この時代の何か歌うのですよという話かもしれないだとすると、やはりそのところを、1回目はまず実験的にやっただけけれども、これからも続けていくとなると、プレイベントと言うのか、たまたまここが前の日になっているだけで、ギャラリーコンサートデーなのか、というのがちょっと、私はギャラリーコンサートデーにしたほうが、プレイベントと言うと、この企画をした学芸員が、この歌は嫌だって言う人とか、こういう音楽にしてほしいとか、もっと総合的にプロデュースしていくという感じがするんです。でも、それとは別の企画なので、何か場借りをしているというのと、何かクロスしている。何とかアートクロスギャラリーコンサートとかでもいいんですけども、何かちょっとシリーズ化していく。

【事務局】 ごめんなさい、ここにはそういうふう書いてあるんですけども、広報のほうには、所蔵作品展のプレ企画ではあるけれども、そういうクロスの事業であるという事は、広報の中には明確に出しています。

【鉄矢会長】 明示して。分かりました。ここで何かやっぱりこのところで明示しておいたほうがいいだろうなと思って、記録のためにもこう。

【山村委員】 曲は何をやるんですか。

【事務局】 日本の曲ばかりで、何だっけな、ごめんなさい、ちょっと今プログラムを持ってきていないんですけども、全部日本の歌です、今回は。

【山村委員】 日本のというのは何か、例えば。

【事務局】 「さくらさくら」とか、あと最後花の、「花の道組曲」だったかな、「汽車に乗って」とか、そういうものでした。ごめんなさい、ちょっと今、下にプログラムを置いてきちゃったんでうろ覚えで。

【山村委員】 今の、唱歌とか童謡でなくて。

【事務局】 童謡でもないです。童謡も入っていますけれども、荅さんのお気持ちとしては、こういうやはり暗い時代なので、少し明るい曲を選んでみましたというコメントは頂いているんですが。

【山村委員】 質問ですが、そうすると、この展覧会の「かげもまた光なり」というテーマとも関係ないし、この美術の森とも関係ない歌を歌うということですか。

【事務局】 「はけの森に春を歌う」という副題なので。

【山村委員】 そういうことね。

【事務局】 うん。春の歌を。

【山村委員】 何かそれは、ここには書いていないけれども、募集するときには、そういうことが書いてある。

【事務局】 はい。もうそれは全部出ます。

【原田委員】 そうじゃないと、何で美術展覧会で歌を聞くのかなというのがおなかに落ちないと、なかなか行きたくならないんで。今おっしゃったような美術の森の春とか、何かテーマが、共通テーマがあったほうがいいかなと思いました。

【事務局】 そうですね。それは広報のほうではそのような形で広報していきますので。

【山村委員】 実際そういう選曲であったほうがいいですよ。

【事務局】 そういう選曲ですね。

【山村委員】 これ、それで場所はあれですか、展覧会場の中で歌うんですか。

【事務局】 そうです。

【山村委員】 40人、お客さんは立って聞くの？

【事務局】 いえ、椅子を出します。

【山村委員】 椅子を出す。そこで聞いて、前には絵が飾ってある。

【事務局】 絵が飾ってある。

【山村委員】 なるほど。いいですね、雰囲気は。

それで椅子を片づけて、学芸員さんが出てきて。

【事務局】 椅子にもう座ったままで、学芸員さんが絵の前に行ってギャラリートーク

をやります。

【山村委員】 ということは、お客さんは座ったまんま体を動かして見る。

【事務局】 そうですね。この前は中村さんがやったんですけども、割合見やすいところの絵の説明をしたり。

【中村学芸員】 そうですね。1階の展示室って、壁を出さないでおくと、真ん中に大きなスペースができるので、その中に演者さんのスペースをつくりました。展示の配置を考える段階でコンサートを想定して、座っているお客さんが、展示している作品を、体こそうそう無理な体勢にしなくても楽しめるようにしています。それで、こちらのほうで演奏が終わった後で座っているお客さんに対してトークをします。なので、思いついてこっち向いてくださいとか、こっち向いてくださいとかというような感じでぐいぐい体を動かすということじゃなくて、座った状態で、全体の雰囲気として展示を楽しみながら、個々の作品についても楽しめるというイメージです。

【山村委員】 お客さんはそうすると始まる前やギャラリートークが終わった後、絵の近くまで行けるんですか、立ち上がって。

【中村学芸員】 基本的には、ギャラリートークが終わるまでは、皆さんは座っていただいています。ギャラリートークが終わった後に、ここにアフターティータイムと書いてありますけれども、アフターティータイムに行かれる方もいるし、あとはまだちょっと、そこですぐ展示室を閉めちゃうというわけじゃありませんから、気になる作品のところに行ったりはできます。

【山村委員】 感染状況、大変厳しい状況なんですけど、40人は多くないかなと思うのと、アフターティータイムでおつまみとか何かがあるのか、何かスイーツの盛り合わせ等って書いてある。結構3月26日がどのような状況かは全く分かりませんが。

【事務局】 そうなんですよね。なので、感染状況を見ながらということで、取りあえずやる予定ではありますけれども、状況が悪ければ、また中止になってしまうかなって感じがします。40人がそのままアフターティータイムに行くわけではないので、御希望される方で、向こうのキャパもありますので、向こうの感染が予防できるというのの人数しか向こうも入れません。一応、こちらは40人なんですけれども、この前のときは50人入れていたんです。なので、ちょっと減らして空間を開けてということは考えてはいるんですけども、ただ、感染状況が悪くなっちゃったら、またやれなくなっちゃうかなというところなんです。

【山村委員】 ちょっと今ひどい状況なので。

【鉄矢会長】 そうですね。

【坂井委員】 これまでも緊急事態のときは閉館が原則でしたっけ。

【事務局】 基本的に東京都のほうから、そういう方針が出されたときは。

【坂井委員】 美術館は閉館してください的な。それは緊急事態のときでしたっけ。

【事務局】 そうですね。

【原田委員】 緊急事態とは限らないです。緊急事態でも開いていることもあります。

【坂井委員】 そうでしたか。

【原田委員】 緊急事態で閉まることもあれば、開いていることもあるので。

【坂井委員】 そうなんですね。

【原田委員】 そのときの状況。今回またオミクロン株で状況も違うので、何とも言えないんですけども、去年の冬から春とまた違う状況ですよ。これでもし学校のほうが休校になったりとか何かすると、多分そういうこともあるかなと思います。

【鉄矢会長】 ありがとうございました。

では、4番目のその他、お願いいたします。寄贈の申出についてですね。

【西尾学芸員】 これは前回の運営協議会の際に、寄贈の申出があったということに関して報告させていただいたうちの1点なのですけれども、11月の末に、私、西尾と河上のほうで実見調査に伺いまして、現時点では本物、真作と見ていいのではないかなと考えつつ、収集評価委員会の開催を予定しているという状況です。

【山村委員】 これ、何のやつだったっけ。

【西尾学芸員】 失礼いたしました。こちらは1923年の油彩画です。

【原田委員】 中村研一の1923年の油彩画。何だっけ、こんがらがっているな。ど  
ういうやつだったの？

【西尾学芸員】 留学しに行く中で、船の上で描いたというエピソードがあります。

【鉄矢会長】 そんなの残っているんだ。

【西尾学芸員】 肖像画です。

【西尾学芸員】 ロンドン丸の機関士さんだった方を描いた油彩で、その機関士の方のお孫さんが今、所蔵されていて、寄贈の申出からその方からあったという。

【鉄矢会長】 ロンドン丸。

【西尾学芸員】 はい。

【鉄矢会長】 イメージは、そうか、まだそういう段階じゃないんだ。見せる段階じゃないですもんね。

【西尾学芸員】 そうですね。まだ預かりに行っていないとか、まだそちらの方の手元にありまして、月末に河上のほうで預かりに行く予定にはなっているんですけども、ちょっとまだ作品そのものはこちらにはありませんで、あくまで実見をして状況とか状態なんかを確認したときの画像というのが、極めて簡易なメモ的なものしかありませんので、まだこちらで画像で報告できるほどのものというのが、準備がちょっとない状態です。

【山村委員】 状態の作品を、割とよいという報告なんですか。

【西尾学芸員】 いえ、状態に関しては、あまりいい状態ではないです。なので、剥落も進んでいる、あと浮きも進んでいるので、もし仮に、まだ決まっていますが、収集評価委員会の決定を受けて収集するとなった場合には、早急に修復が必要な作品ではあります。個人宅の日本家屋でずっと保存されていたものなので、致し方ない部分は大きいと思います。

【山村委員】 絵そのものは比較的。

【西尾学芸員】 全体で見た場合は、全然大きな欠陥はないです。

【山村委員】 というか作品そのものは本人に間違いなし。

【西尾学芸員】 そうですね。

【山村委員】 いいものですか。

【西尾学芸員】 そうですね。描かれた時代を考えると、とても貴重なものだと。

【中村学芸員】 作風としてはすごく、やっぱり留学前の中村研一の感じがよく出ているとか。私もちょっとまだ画像でしか見ていないんですけども、何か本当にまさに洋上で描いたという、光の明るさというのがかなりきれいに出ている印象ですので、すごくそういう意味では面白い作品だと思います。機関士のモデルさんというのも、本当に海の男らしく精悍な感じで描いてあるので、多分、壮年以上の男性の肖像画って、どっちかというところと灰色っぽくて、あんまり魅力的に見られないことが多いんです。でもこれは、すごく意外性があって、光があって明るくて、画題としても面白いと思います。

【鉄矢会長】 すごく自由に描いていたんですかね。頼まれて描いたというんじゃない感じなのかな。

【西尾学芸員】 ちょっとそこがはっきりしない。

【鉄矢会長】 エピソードはお孫さんとか持っていないんですか。



【河上学芸員】　　でも描かれた方の、モデルさんになった方の奥様のエピソードがもしかしたら出てくるかもしれないという。

【鉄矢会長】　　すみません、先生、話が途中になって。

【原田委員】　　いえいえ、今メモを見ました。あれですね、K氏の肖像に近い。海を背景にしている油絵20号程度、これがそうですね。

【中村学芸員】　　そうですね。それです。ただ、K氏の肖像みたいな暗いイメージとはかなり真逆のというか、本当に海の上で天気の良い日に真っ青な空をバックにして描いているような印象の。

【山村委員】　　割と展示映えしそうな感じですよ。

【中村学芸員】　　そうですね。ただ、ちょっとやっぱり状態は、さっき指摘があったように、写真で見る限りでもちょっと危ないなという感じの状態です。

【山村委員】　　持ってくるときに気をつけないといけない。

【事務局】　　そうです。

【鉄矢会長】　　修復前、修復後が両方比べられるといいですね。

【事務局】　　ただ、ちょっと修復前に出せるかどうかというところもちょっと怪しいです。

【鉄矢会長】　　いや、写真だけでも、修復前の写真がこれだったんですよというのを。

【坂井委員】　　どちらにあるんですか。地理的には。

【河上学芸員】　　横浜。

【坂井委員】　　横浜にあるんですか。

【鉄矢会長】　　では、次に、意見交換、後半戦。何かありましたらよろしくお願ひします。

【山村委員】　　ごめんなさい、ちょっと聞いてもいいですか。

【鉄矢会長】　　はい。

【山村委員】　　中村研一、3月からの展覧会の「かげもまた光なりー中村研一の色」という、特に色に注目されている中で、中村研一の、これは春にちなんでいるということだと言ったんですが、中村研一の色というのは、同じことを聞くかもしれないけれども、どんなあれですか。あんまり、ちょっとアカデミックな印象があるんで。

【河上学芸員】　　そうですね、今回、戦後の作品を中心に展示をする中で、まず戦前と戦後の大きな違いとして、やはりカラフルでビビッドな色が、戦後の作品に見られる

というのが1つ、個人的な印象としてあったので、この企画を思いついたというところがあります。戦後というと、ちょうど小金井に移ってきたという転換期、ところのちょうど境目のところに触れるわけなんですけれども、戦後、小金井でどういうふうに通じていたかとか、そういったところにも注目をしたいと思っています。中村は写実の人だと言われておりますけれども、彼の言う写実とは何なのかというところ、彼が求めていた写実というのが一体どういうものなのかというのを色を通して注目できたらなと思っていて、ただ単にカラフルであるというところではなくて、彼が色を用いて、彼の写実をどういうふうに追求したのかというようなどころから展示を今考えています。

【山村委員】　　ということは、ごめんなさいね、だから色の使い方というのが、例えば印象派から影響を受けて、アカデミックで写実的なんだけど、かげもまた光なりと捉えると、何ていうか、印象派の影響を受けているとか、そういうふうに捉えられるんだけど、そういうことかな。

【河上学芸員】　　そうですね。印象派からというよりも、いろいろな影響を受けて、彼の写実というものが、いわゆるリアリズム、写実的という意味のリアルではなくて、本当に絵の中に真実を見つけるという大きなテーマを基にずっと絵を描いている。例えばそれを立体的に見せるとか、こう見せたいということではなくて、自分の目の前にある光景とか目の前にあるモチーフを、光も影も全て同等に捉えて色を置いていくというような作業をしていたと考えているんですけれども、その色の置き方とかそういったところ、例えばだんだんグラフィックになっていくという傾向があったりですとか。しかし、だからといって戦前の色使いが全くなくなったというわけでももちろんないので、そういう連続性なんかもみながら。章立てを今一生懸命考えているところなんですけれども。

【山村委員】　　結構難しそうな展覧会だな、これ。

【河上学芸員】　　そうなんです。

【山村委員】　　分かりました。

【河上学芸員】　　ありがとうございます。

【山村委員】　　すみません。ありがとうございます。

【鉄矢会長】　　ありがとうございます。

そのほか、ございますでしょうか。

鉄矢です。

先ほど大川美術館の話が出たんですけれども、過去に連携した美術館が、浜松市美術館

みたいな名目がはっきり分かっていると浜松かなと分かるんですけども、大川美術館みたいに、それがどこにあるのっていう美術館もあると思うんです。それがもし、ちっちゃなマップでもいいけれども、ピンを打って、こことうちは連携していますよってウェブページにあたり、連携してやった展覧会はこれですよとかあると、小金井の人が旅をしようと思ったときに、ああ、あそこに行くとなれがあるらしいよって。せっかく連携した美術館、一度は連携したんだから、今度は皆さん、あっちに行ってあっちのを見てきてくださいよというようなイメージの何か情報発信をすると、向こうもこっちに来るような気がする。

【中村学芸員】　そうですね。そういうのができるといいなと。

【鉄矢会長】　何かウェブページがどういうのがいいのかなと今ちょっと思いながら、何かそんなふうに過去に連携して、やらせようのイメージがすごく強かったんで浜松だなと思っていますけれども、ほかのところもこういうようにあるんだよとか、ここに来たらあるよとか、もう1回、せっかく中村研一を見たいんだったら九州に行つてとか、何かそういうふうなネットワーク関係が、この小さな美術館だから、小さな美術館同士がうまくつながって、出会えるようなことができてもいいかなとちょっと思いました。

【中村学芸員】　ありがとうございます。

【鉄矢会長】　そのほか、ございますでしょうか。

【原田委員】　この大川美術館って桐生市にあるんですね。

【中村学芸員】　はい、桐生にあります。

【原田委員】　たまたま仲のよい友達が桐生出身なんで、大川美術館知っているかって言ったら、当然だと。自慢の美術館。ぜひ見にいったと言っていました。

【中村学芸員】　そうなんですね。

【原田学芸員】　たしかに大川というと、あれ、どこだっけかと。

【鉄矢会長】　そうですね。私も。

【中村学芸員】　そうですね。ここは大川栄二さんという方が建てた、もともと個人のコレクションにかなり強い形で結びつくところなので。

【山村委員】　地元の有名な実業家らしいですね。

【中村学芸員】　そうですね。

【山村委員】　壺とかもためているんですか。

【中村学芸員】　いえ、壺をためている人は、多分、安宅さんという方なんですけれど

も。

【鉄矢会長】 もう1個美術館があります、じゃあ桐生に。

【中村学芸員】 もう一つはオノサト・トシノブ美術館。

【鉄矢会長】 そうですか。分かりました。その他、ございましたら。

なければ、本当の意見交換を終わらして、3番のその他のほうに入ります。まず事務局から議事録の校正についての説明をお願いします。

【事務局】 今日お配りした議事録につきましては、来月の2月の25日ぐらいまでに、校正があれば私のほうまで御連絡をお願いします。

事務局からは以上です。

【鉄矢会長】 以上で協議会をおわります。

— 了 —